



カントウータ

# Cantuta

No. 34



ウユニ塩湖 (撮影者 椿 秀洋)

- |   |  |       |        |
|---|--|-------|--------|
| 1 | モラレス大統領4期目に向けたポリビアの政治経済情勢<br>—厳しさ増す内外環境— | ..... | 遅野井 茂雄 |
| 2 | スクレに暮らして13年                              | ..... | 梶川 嵯慧子 |
| 3 | 2018年8月ポリビア旅日記 (その1)                     | ..... | 渡邊 英樹  |
| 4 | じゃがいもの旅の物語 (連載23号)                       | ..... | 杉田 房子  |

一般社団法人日本ポリビア協会 ASOCIACIÓN NIPPON-BOLIVIA

<http://nipponbolivia.org>

## 1. モラレス大統領4期目に向けた ボリビアの政治経済情勢

### —厳しさを増す内外環境—

筑波大学 名誉教授

遅野井 茂雄

#### ボリビアの奇跡

本年2018年8月12日で、エボ・モラレス大統領の2006年1月の大統領就任後12年6カ月と23日が経過した。これは同国の歴代政権の中でパス・エステンソロ元大統領の在任期間を抜き最長記録の更新である。

この間、資源価格の高騰という外部環境に恵まれたとはいえ、独自の民族主義政策と慎重なマクロ経済運営によって、2006年以降、年率5%平均の高い持続的成長を達成した。その結果、先住民の地位向上や所得の再分配政策と相まって、60%以上あった貧困人口は38%まで、また、40%近くあった極貧層は18%まで減少するなど、長年に渡るラテンアメリカの「最貧困国」を「中所得国」へと変貌させた実績は傑出したものがある。

2014年以降「資源ブーム」が終焉し、中南米諸国全体が経済の低迷に沈む中で、5%台からは減速したものの、依然4%以上のGDP成長率を維持してきたことは、まさに「ボリビアの奇跡」とも呼んで然るべき実績を挙げたと言えよう。

#### 4選は既定路線

しかし、貧困人口の割合はいまだ30%を超えている。現政権が任期中に「極貧人口の比率を一桁台に引下げ、さらに2025年の独立200周年までにはゼロにし、全国民に教育や医療、社会保障などの基本サービスへのアクセスを保証する」という開発目標

(Agenda Patriótica 2025)の達成までにはまだ大きな距離があるのも事実であり、変革は未だ途上である。

もとより現政権が「革命政権」という性格を疑う余地はない。「民主的革命」を掲げ、先住民などの街頭デモ動員などの社会運動による圧力や

国民投票を駆使し、3分の2を越す絶対多数によって議会を支配し、司法府を含め三権へのヘゲモニーを確立し、そして反対派を巧みに抑えて改革を推し進めてきた。モラレス大統領の4選は、政権や支持者にとって既定路線として捉えられてきた。



写真1-1 モラレス大統領(ボリビア大統領府HPより)

しかし3選出馬は自ら制定した現行の2009年憲法上は禁止され、正確にはその是非を問う2016年2月21日の憲法改正のための国民投票では51%と49%の僅差で否決された。だが、2017年11月28日、大統領の連続再選の回数を2期までと制限することは違憲との与党MASの申立てに対し、憲法裁判所は、米州人権条約が優先的に適用されるとの理由から再選に制限を設けるべきではないとの判断を下して国民投票による民意はあっさり覆された。こうして3選出馬と4期目への道が開かれたのである。

この間のプロセスは、国民投票にその正当性の基盤を置いてきた統治原理に政権が自ら背くことを示したものであり、内外の批判を招いた。直後の2017年12月に行われた司法官選挙でも無効票が52%と半数を占め、憲法裁判所の判断に反対への意思表示がされるとともに、その後の世論調査でも概ね70%が違法との見方を示している。ボリビアのカトリック司教会議も無制限の立候補について、民主主義の原則に悖るものと非難している。

だが、「人民主権」に基づく「革命政権」につ

て、政権の継続は至上命題である。今年に入り、ガルシア・リネラ副大統領は、モラレス大統領は「国民の統合を個人的に体現する」象徴であり、彼を

「失うことはボリビアにとって政治的自殺」に等しいと断言している（2018年1月7日付電子版スペインEl País紙とのインタビュー、）。あとは法的手続上の障害を取り除き、有権者に判断を委ねるといふことだ。



写真1-2 モラレス大統領(新聞より)

### 好調なマクロ経済に陰り

しかし、4選に向けた前途には厳しい情勢が待ち構えている。

政権発足以来ルイス・アルセ経済大臣（昨年末に体調不良を理由に退任）の下で、一貫して慎重なマクロ経済運営を心掛け、社会政策に十分目配りをしながら、経済の安定とともに、高い成長を持続してきた。それが新自由主義に反対する中南米の左派政権の中では、突出して高い社会・経済に渡る実績を通じて政権基盤の安定を支えてきたのである。

だが、その政策は、天然ガスをはじめエネルギー鉱産品など資源価格の低迷により、徐々に国家財政に負担を強いる結果となっている。資源収益の落ち込みに対応して、好況時の財政黒字をバッファーとし、借入れを通じての公共投資のテコ入れや、各種消費物資への補助金などの景気刺激策をとり、4%の高い経済成長率を下支えしてきたからだ。

その結果として直近で財政赤字がマイナス6%台

に拡大し、公的債務がGDP比50%まで増大した。とくに公共部門への融資によって外貨準備が急減している。2014年にはGDP比46%、150億ドルを越え中南米で最も高い水準を誇ってきたが、その後、17年にはGDP比28%、今年8月で90億ドルまで急減しており、IMFの見通しでは19年には半減する。

今後、鉱物資源の国際市況が急速に改善するとともに、天然ガスなど新たなエネルギー資源開発により生産が伸びないかぎり、4%の成長率を維持しようとするればマクロ経済の安定を犠牲にせざるを得ないのではないかと懸念されている。即ち、経済社会開発計画（PDES 2016-2020）で打ち出された年率5.0~5.8%の成長を続けて、一人当たりのGDPで5000ドルという高い目標達成は到底できる状況ではない。すでに経済的社会的指標も停滞している。

最大のネックは、「ボリビアモデル」ともいうべき資源ナショナリズムを背景にした国家主導の「共同体的生産モデル」自体に潜んでいると言えよう。つまり「国家により資源を管理して再配分」し、そこから生み出される余剰を、貧困削減など社会政策に向けるとともに、雇用と付加価値を生み出す新しい生産分野に投入することによって二次産業を開発し、旧来の採掘型資源開発と一次産品輸出へ依存する「経済モデル」からの転換を目指そうとする試みは限界に突き当たっている。（PDES 2016-2020」p.13）。

問題は資源から生み出される余剰をいかに継続的に確保するのだが、資源価格の低迷状況と、厳しい外資規制の下で外国からの直接投資も伸びず、新規の開発も進まない中で現行モデルは限界に達しつつあるのではないかと懸念されている。PDESには、合弁等による外国直接投資の促進策が謳われており、厳しい外部環境が迫る中での外貨獲得の手段として、また4選に向けての公約として、資源の工業化の実績を誇る必要もあろう。例えば、全世界の埋蔵量の約50%を占めるとみられながら独自開発に拘るあまり停滞してきたウユニ塩湖のリチウム開発でも、昨年、外資との合弁を可能にする法改正がなされ、今年10月に

はりチウム公社とドイツの民間企業（ACI Systems）との合弁に合意がなされた。これも外貨準備による中銀からの融資に基づく事業の推進の実例であるが、多くの肥大する公的部門で共通する融資の効率的生産的活用の保証もなく、外国の技術の導入などを通じてもビジネスとして成り立つレベルで生産が本格化するかは予断を許さない。

また資源ブーム時の米ドルの流入と2011年からの為替の固定相場への転換により、現地通貨ペソは増価しており、その結果、輸入が増大し内需の拡大につながったが、輸出競争力は抑制され、経常収支の赤字を広げている。

実際、世論調査などでも、多くの国民が経済の変調を認識している。中長期的にこれまでの社会的な実績が損なわれないためにも、民間投資を促進しその活力を利用するなど政策の見直しが必要となっている。だが、国家主導の現行経済モデルの堅持は、政権のイデオロギーや基盤に関わるものであり、また選挙を前に、為替の切り下げやガソリン・食料などへの補助金の削減などの調整に踏み切る余地も少ないであろう。今後選挙までの1年間は現行のモデルに基づき、インフラなどの公共投資や最低賃金の引上げなどを中心とした景気浮揚策を継続して行わざるを得ず、問題がさらに深刻化することが予想される。

### 落胆させた国際司法裁判所の裁定

こうした隘路を打破するためにも、宿願の「海への出口」をめぐるナショナリズムに訴えることが目指されたが、5年前のボリビア政府の提訴に対し、去る10月1日に出されたハーグの国際司法裁判所の裁定は現政権を大いに落胆させるものであった。大統領自らハーグに乗り込み、ボリビア側に有利な裁定が示されるだろうと期待して臨んだボリビア政府代表団にとって、チリ政府に交渉を義務づけないとする裁定は予想外であったろう。

この裁定の直後に、来年の選挙に向け、カルロス・メサ元大統領が出馬を表明し、4選阻止に向けキ

ャンペーンが開始された。但し「海への出口」問題は、ボリビアのナショナリズムに係わる性格を有しており、ハーグの裁定を政治的に利用することは逆効果ともなり得る。むしろ、政治の安定と強い指導力の継続こそが、チリ政府とのハーグ後の交渉力を高めるとの立場から、政権側がその存続を正当化するために利用することもあり得る。



写真1-3 モラレス大統領(新聞より)

### 孤立深める左派政権

他方、国際環境もボリビア政府にとって厳しさを増している。天然ガスの主要供給先であるブラジルは経済の低迷から抜け出せず、アルゼンチンは米国の金利上昇から通貨防衛に苦しんでおり、今年は3%弱のマイナス成長に陥ることが予測されている。

極右候補のボルソナロが勝利したブラジルの選挙結果に見られたように、左派政権の退潮が地域的にも顕在化してきており、ボリビアの孤立感は深まりつつある。

南米諸国連合（UNASUR）は、事務局長の選出をめぐり、ベネズエラとボリビアが他の加盟国と対立して、コロンビアのドゥーケ新政権が正式に離脱を表明し、主要国も活動への参加を停止するなど、実質的に機能不全の状態が続いている。エクアドルのコレア政権の後継のモレノ政権は、前政権の政策を転換し、ALBA（ボリバル同盟）から、距離を置き始めた。またブラジルの次期政権はBRICSから距離を置き、米トランプ政権との関係強化に転換してゆくことが明らかとなっている。

ALBAを主導するベネズエラは、経済規模が5年前半減するまでに縮小し、100万パーセントを越す（I

MF予測) 超ハイパーインフレの下で、独裁化と人道危機が進み、周辺国に200万を越す避難民を流出させる事態になり、民主制の回復と地域国からの支援受け入れを迫るリマグループからの圧力にさらされている。同じくニカラグアのオルテガ政権は、今年に入って拡大する反政府抗議活動に対する人権侵害問題が、国際的に厳しく批判されている。

この中で、ボリビアには、UNASURとCELAC (ラテンアメリカ・カリブ諸国共同体) の議長国の役回りがめぐるってきた。このような情勢下で、現モラレス大統領は来年2019年末に自らの連続3選に向けた選挙を執行することになる。米州人権条約を根拠とした3選出馬には、2016年の国民投票に監視団を送った米州機構 (OAS) のアルマグロ事務総長も反発しており、OASの選挙監視団を派遣することは期待できないであろうし、米国の関与を避けるためにそもそも監視団を受け入れるとも思われない。アメリカ抜き地域協力機構であるUNASURやCELACも、内部の路線対立からモラレス政権の継続に向けた選挙プロセスに安易に関与して、政権の存続にエンドースを与えるとも考えにくい。

### 代替モデルの具体化と結集に向けて

自由で公正な選挙が保証されている限り、いわゆる「競争的権威主義政権」も、敗北する可能性がある。野党側は、長期政権の下で、社会に深い基盤を築いたヘゲモニー型政党から政権を奪還するには、政権側の居座り続けようとする新たな試みに反対するだけでなく、候補者を一本化して代案としての統治プランを打ち出し、広範な支持を得る政治姿勢の転換が求められよう。昨年9月に、有識者や政府経験者など180人から出されたAgenda 21Fなど代替的な統治モデルを具体化し、候補者や勢力を結集することが必要である。

出馬宣言したメサ元大統領には、新たな汚職疑惑が突きつけられている。議会において、ブラジルの大手建設企業オルデブレイト社に絡む汚職調査委員会が4月から行ってきた調査結果を11月に入り公

表し、メサ元大統領の関与を仄めかした。これまでもそうであったように主要な野党候補者について、メサ氏の大統領や首長時代の運営に絡む様々な問題をテコに、検察を通じて合法的に追い込み切り崩し、その活動を抑える手法は、今後も選挙戦を通じてみられていくであろう。

だが仮に、モラレス大統領が選挙で3選を成し遂げたとしても、これまでのように議会での絶対多数を維持できる保証はない。その場合、議会の権能を無視したベネズエラ型への転換がないとすれば、厳しい政権運営を強いられることになり、これまでのような独裁的権威主義的な政権運営は困難となるのではなかろうか。

最期に上記は、あくまで私の個人的見解であることをお断りして置きたい。

(終わり)

## 2. スクレに暮らして13年

スクレ在住・文化活動ボランティア

梶川 嵯慧子

” 貴女は何故ボリビアに来られたのですか？”

初対面の方から必ず出てくる質問です。実は私は初めペルーに行くはずだったのです。文化人類学をアメリカのカリフォルニア州立大学バークレー校で学び、インカ文明を知りたくてクスコとマチュピチュを4ヶ月ほど旅する予定でした。リマ行きの航空券を買っていたにも拘わらず出発直前に様々な理由からスクレに行くことを勧められました。ボリビアの首都だと言われて初めて南米にボリビアという国があったのだと知りました。風吹くままに流されれば良いと気軽な思いで始めた旅、リマからバスを乗り継いで三日間、ようやくスクレに辿り着いたのは朝5時半、やれやれとほっと一息入れてバスを降りそこで初めてパスポートや現金の入った袋を盗まれていた事に気づきました。外はまだ真っ暗、言葉も碌に通じない異国の街、ホームステイ先の住所も失くし、途方に暮れて辿

り着いたのがスクレの中心広場。ベンチにぼうつと座っている間に朝日が少しずつ射し込み ふつと気づくと私の目の前には真っ白な大聖堂と美しいスクレの街並みが浮び上がって来たのです。今思えばあの瞬間に私はこの街に取り憑かれてしまったのでしょうか。またそんな災難にあったからこそ多くのボリビア人の優しさに触れ、この街が自然に心地よき故郷となったのでしょうか。あれから13年、この5月25日広場は今も私の心を癒してくれています。



写真2-1 5月25日広場に立つ美しい大聖堂の鐘楼



写真2-2 サンフェリペ教会から見渡す街並みと藍色の空

この街に住むと決めて最初に手がけたボランティアの仕事は水道も電気も無い田舎での家庭調査、その体験はそれまで自分が持っていた価値観を大きく覆しました。家庭内暴力の被害者のためのシェルターで働いていた際、女子生徒の意識を変えるには教育から始めるべきだと思い、郊外の農村で子供達に数学を教えること5年、その間に生活のために始めた観光ガイドの仕事に少しずつ嵌っていきました。

今も16世紀の面影に満ちたスクレは世界文化遺産に選ばれる美しい街ですが 実は歴史的にも非常に重要な場所なのです。1538年にスペイン人が植民地としてボリビアの中で一番、最初に建てた「都市」で、異国の生活を少しでも快適に暮らせるようにとその当時のスペインの街並みを複製するかの如く計画的に作られました。スクレを象徴する二つの丘の裾に広がるように道路が碁盤の目のように真っ直ぐに引かれ その一区画が各150メートル、道路幅10メートル、白壁の外壁は1.5メートルを超える分厚さ、その中に入るとパテオと呼ばれる中庭があり その中心部には必ず噴水があります。生活に必要な水をそこから汲んだのです。絵画、家具、宝石、衣類、その他、生活に必要なありとあらゆるものがスペインから持ち込まれたことでしょう。

その後、当時世界で最も大きな銀山のあったポトシの街とともに、スクレは文化、経済、宗教の中心として発展しました。そして1809年5月25日にこの街で反乱が起きたのを切掛けにボリビアはスペインからの独立を宣言し、独立戦争が南アメリカ各地に広まっていったのです。中心広場の名前はその日付から付けられており、「スクレ人」にとってはまさにこのスクレが南アメリカで独立戦争が「生まれた土地」なのです。その後16年という長い戦争を終えた1825年8月6日に、このスクレでボリビ共和国の憲法が作られ

て首都となりました。そして政治や文化の中心として華やかな舞台が繰り広げられましたが、経済・産業の発展には遅れをとり19世紀の終わりには事実上の首都がラパスに移り、その後は古くからあった大学を中心とした学生の街となりました。だからこそスクレは16世紀のスペイン時代の街並みが壊されることなく、古い建物はおしゃれなホテルやカフェとなり、数多くの語学学校や博物館が立ち並ぶ、安心で、静かな、それでいてエネルギー溢れる文教都市となったのです。



写真2-3 春先にスクレを彩るジャガランダ

私がボリビアに来てから13年の間にボリビアの政治や経済にかなり変化が起り、人口も増え、国民の生活習慣も変わりました。現在はボリビアのほとんどの村にも電気が通っていることでしょう。特にラパス、サンタクルス、コチャバンバは大都会に変貌しました。しかしスクレで、中心広場に座って真っ青な空に浮き上がる白い大聖堂と、それを飾るジャカランダの花を見つめていると、何も変わらぬ昔のまま、全てが他の世界で起っているような錯覚さえも起こします。私のように静かでゆとりのある生活を求めてやってきた、そして何よりもこの街を愛するという共通点を持つ外

国人が今一杯この街に住んでいます。でも未だに日本人の定住者はほとんどいません。元々アメリカ生活が長かった私は日本人というよりもアメリカ人としての意識の方が高かったのですが、彼らと共に色々な文化活動に加わっていくうちに、私の中に日本人としてのアイデンティティが沸き上がってきました。

そして今年ようやくここにスクレ日本ボリビア文化協会を立ち上げたのです。4月にはスクレ初の文化祭も行いました。協会を立ち上げて初めて気づいたのですが、この街には既にボリビア人による柔道と空手の協会があり、盆栽クラブやアニメクラブも永く存在していました。日本人のほとんどいない街だからこそ 市民の日本への興味も他の街よりずっと高いのでしょう。お蔭さまで初の日本文化祭は大盛況となり、その後もスクレ市恒例の文化イベントである FIC(Festival Internacional de la Cultura)に日本大使館とともに参加し、11月には FEXPO SUCRE (Feria Exposicion Sucre)という国際文化祭にも日本文化担当として招待されています。今月から事務所も手に入り、要望の高かった日本語学校をようやく始められることになりました。

今後も JOCV (日本海外青年協力隊) やその他のスクレに来てくださった日本人ボランティアに支えられながら、そしてボリビア他県の日ボ協会や日本大使館の助けを借りながら、日本に興味を持つスクレのボリビア人に日本を知ってもらう機会を提供していきたいと思います。そして日本の皆様にもこのスクレの街の素晴らしさを少しでも知ってもらうために これからしばらくは、その橋渡しをすることを本業として頑張っていきたいと思っています。機会があつてボリビアにお越しになる際にはぜひスクレにお立寄り下さい。

(終わり)



写真2-4 スクレ日本ボリビア文化協会の皆さん

### 3. 2018年8月：ボリビア旅日記

#### (その1)

日本ボリビア協会相談役  
元海外移住事業団ボリビア駐在  
渡邊 英樹

本年2018年の夏、ボリビアのコロニアオキナワで「オキナワ県民ボリビア移住110周年記念式典」が開催された。JICAの前身の一つである海外移住事業団のサンタクルス支部に在勤した時にコロニアオキナワ農牧総合組合(CAICO)の設立に関わった縁で招待を受けたのを機に、子育ての一段落した長女を帯同してのボリビア訪問である。

まず、旅に先立ち、一般には知られていないルートを探して見ようと思い立ちオーストラリア経由で行ってみることにした。その最大の理由は、米国でのトランジットの煩わしさを回避したいが為である。さらに成田空港からではなく羽田発で22:00という時間帯も気に入った。

#### ・8月7日 (羽田⇒シドニー)

羽田空港で見送りに来てくれた長男一家と国際線ロビー内の食堂で夕食をして、20時にゲートインして予定通り機内に。カンタスのボーイング747のフルフラットは椅子が伸びる形式であるが寝心地はイマイチ。電動マッサージ付きであるが程度

が悪く、かえってイラつく。企業人はセンスを持ち合わせていないと無駄な投資をするといういい例である。セントアンドリュースへのゴルフ旅行の時に乗ったブリティッシュ・エアウェイズのフルフラットはシンプルにベッドで寝ている感じになって心地良かった。このカンタスの良かった点はパジャマの上下があったこと。但し、スリッパがついていて欲しかったがソックスだけだったのはちょっと残念。機内食は羽田積み込みなのでまあまあ。ワインを飲んでよく眠って、約9時間30分のフライトで、シドニー空港に8日の朝の8:30に到着。

#### ・8月8日 (シドニー⇒サンチャゴ)

空港のラウンジで休憩したり、運動不足解消のウインドウショッピングで約4時間を潰し、チリ・サンチャゴに向けて12:30再び機上へ。南極大陸が見えるはずであるが曇っていて残念ながら見えない。

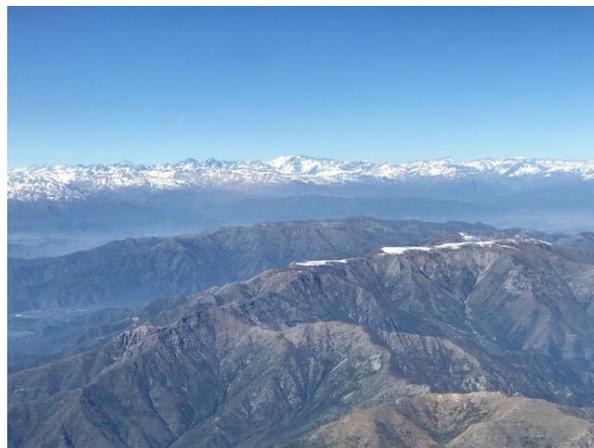


写真3-1 南米大陸の最南端から最北ベネズエラまで7500kmにわたって太平洋側に連なるアンデス山脈を右手に見てサンチャゴに至る

南米大陸の最南端の陸路が見えてから延々1時間以上、6000メートル級の高い山もある一面の雪を被ったアンデス山脈を右手に見て北上し、約13時間のフライトで、午後12時30分に無事サンチャゴに到着。空港到着口の目の前のHoliday Innは我ながらベストチョイス。直ぐにシャワー浴び

て、ちょっと苦みがあるが美味しい生ビールで乾杯。前菜として頼んだエビ、イカ、タコのピリ辛炒めとセビツチを見ただけで腹いっぱい！メインのチーズの炒めご飯の上に乗った厚さ3センチはある大きな鮭に言葉を失う。夕食は抜くことにして格闘開始。チリ産ワインの助けもあり何とか二人とも完食。



写真3-2 炒めご飯の上に乗せられたサケの切り身の厚さに驚愕

#### ・8月9日 (サンチャゴ市内散策)

昨日のランチの後は、空気が乾燥しているので、バーに何回か下りてトマトジュース、コーヒーなどで水分補給。さらにその都度ペットボトルを二本ずつ買って戻る。

7時起床。南半球は冬であり、外はまだ真っ暗。朝食を摂り、市民の生活を見たいので、路線バスに乗って40分、市の中心部のバスターミナルで下車。45年前の静かな、車の少ない街の風景とは一変して凄い車の数と喧騒の街と化している。

45年前のサンチャゴはアジェンデ政権の崩壊前で、ひどい状態であったことを思い出した。冷戦の縮図のようになっており、左翼化路線を進めるアジェンデ政権とアメリカの意向を受けた軍部との軋轢は極限に達していて、経済は混乱を極めていた。サンチャゴの最高級ホテルが、闇で両替すると、なんとたった2ドル50セントで宿泊可能であった。タバコを吸っていると立派な身なり紳士が近づいて来て、1本恵んで欲しいとのこと。3

本渡すと平身低頭であった。長い行列が出来ているので、何かと聞いてみたら、パンを買うための行列であった。ワインを買おうとしたら空きビンを持って行かないと買えないとのこと。この旅行から帰った1月後の1973年9月11日にピノチェットのクーデターによりアジェンデは殺され左翼政権は終わった。これにはアメリカのCIAも深く関わっていたと言われていたので、ニューヨークの9.11のテロ攻撃の時には、何か関連があるかもしれないと思ったものである。

旧市街はほとんど昔のままの状態で、今にも朽ち果てそうなビルがメンテナンスもなされないままであり、昔のトロリーバスをガソリンで動くように改造した2両連結のバスが何回塗装しなおしたか分からない感じで現役を務めている。かつてチリ硝石で栄えたころの遺産に頼っているように見受けられた。ところが新市街に行くと同様は一変して、近代的ビルが建っている。日本のスクラップアンドビルトとは考えが違うのかもしれない。散策の後、高さ300メートル62階のモールタワービルの最上階から街を眺めると、この街は西側が海岸方面に開かれているほかは、3面がアンデス山脈に囲まれている感じが良く分かる。

帰りには、バスターミナルでタクシーを降りたら、二人共に頭からカラスの糞害にやられる。憤慨！ホテルでシャワー浴びて一眠りして今は16時。このあと20時にボリビアへの搭乗手続きに向かうまで、部屋でボリビアへの土産の整理にかかる。沢山の人が昔の写真をコピーして持ってきたので、その仕分けにたっぷり時間がかかる。

#### ・8月10日 (サンチャゴ⇒ラパス⇒サンタクルス)

昨夜は、20時にホテルを出て、搭乗手続きを済ませる。荷物預けと出発ゲートがかなり離れているのは2020年のターミナルビルの完成に向けて空港全体が建築現場の様相を呈しているためである。出国審査も済ませて搭乗口を確認。時間

潰しのためレストランに入り、スモークサーモンサラダと赤ワインを注文。その後、ピスコサワーを注文。ここのピスコサワーはサトウキビの蒸留酒とレモンと砂糖をシェイクしたもの。まあまあであるがボリビアのピスコの方が格段に美味い！ボリビアのピスコサワーはぶどう酒の蒸留酒であり、そこに卵白とレモンを合わせてシェイクして、その後にニッキの粉を振る粹なもの！そのウンチクを娘に語りながら、やはり酒が強い娘と、気持ち良く飲んでいたのがいけなかった！

ついに、大失態！頃合いを見計らって、搭乗ゲートに行き、あまり人がいないのに驚いて確認するとゲート変更があったとのこと。変更ゲートに行くにはほぼ反対側まで歩くので時間がかかってしまいゲートをちょうど閉めたところに到着。まだ飛行機は繋がれた状態にあったが、もうダメだと断られる。

やはり日本ボケしたと思う。以前は頻繁に便名とゲート番号をチェックしていたのに、すっかりと忘れていた。改装のためか館内放送も無かつたのである。見れば運行表示番に、ゲート変更に注意するようにと表示はしてあった。日本の常識が通用しないことを改めて思い知らされる。

出国ゲートに戻り、事情を説明したら親切な女性が出国スタンプを消しに行ってくれて、さらに我々を引率して入国管理局もノーチェックで通してもらい飛行機会社の窓口まで案内してもらった。しかし、同じ航空会社では12日までサンタクルスへの便はないとのこと。これ以上はどうしようもないので、航空会社のカウンターで降ろされた荷物を回収して別の航空会社で探すことに。ところが荷物回収を依頼してから1時間半経ってもなんの音沙汰もなし。真夜中にトラブルったバゲージを手元に回収できると思う方が無理であったかも知れない。もう35年間もほとんど使わずにサビさせてしまった私のスペイン語だから手こずった。

サンチャゴからボリビアのサンタクルスまでチリのLATAMを利用していただけ、チケット売りの男性は自分の航空会社の切符でサンタクルスまでの変更を試みて「直ぐに行ける便はない」との一転張り。もう一度搭乗カウンターに戻って

「LATAM」のチケットを無駄にしてもどんなにお金がかかっても、とにかく最短でボリビアへ入りたい」ということを理解してもらって、便を調べてもらったら、何と同じLATAMで、朝7:30にラパス便があると言うではないか。

直ぐにチケット売りのカウンターに戻ってサンタクルスに行けなくていいからラパス便の座席を売って欲しいと依頼したところ長時間待たされたが、ようやく確保できる。代金はルート変更ということで請求されなかったのも、それで時間がかかったらしい。



写真3-3 高さ300メートルのモールタワーからサンチャゴの新市街を見下ろす

直ぐに到着口に戻って「チケットを見せてバゲージを探して我々と同じ便に乗せて欲しい」と依頼。彼女は了解して、カウンターを閉鎖したのち、また、改めて朝6:50までに来てくれとのこと。朝3時半にしてようやく解決。再び空港前のHoliday Innに戻ると幸いに空室があるとのこと。とりあえずシャワーを浴びて横になる。娘は寝過ぎと困るというので起きているとのこと。仮眠して1時間半後に搭乗手続きのカウンターに行くと彼女はもういない？！

カウンターの女性に改めて荷物の件を説明してとにかく一緒に便に乗せて欲しい旨依頼。1時間遅れの朝8:30にバスで駐機場まで移動した際に、機体の脇にあるトレーラーの中に自分のトランクを発見できた時には小躍りした。同じ航空会社の利用でなかったらこうは上手く行かなかったであろう。

ラパス到着の少し前にウユニ塩湖の上空を飛ぶので、娘はかえってアクシデントを喜んで、初めて見る塩湖を熱心に見入っていた。38年前の小さい頃で記憶になかったボリビアの山々を眺められたことも良かったようである。ラパスに到着して標高4080メートルのエルアルト空港を急ぎ足で地元航空会社のカウンターへ。幸運にも1時間後のサンタクルス便の座席を二人で92ドルで確保でき高山病を発症する前に離陸!! 55分後にはサンタクルスに無事到着する。本日の長〜い1日もようやく目的地のサンタクルスに遅ればせながらも予定の日の内に着くことができ、終わりとなる! 16時半から夕食を取り18時には眠りに落ちる。



写真 3-4 ボリビア・サンタクルス市の中央広場に建つカテドラル(大教会)

目が覚めると22時、娘はさすがに疲れたのか良く寝ている。明日は、8時にオキナワの式典実行委員会手配の迎えの車が来て、11時からの慰霊祭

に出席。明後日は本番のボリビア沖縄移民110周年の式典である。とにかく間に合った!

(次号につづく)

#### 4. じゃがいもの旅の物語 (連載 23号)

旅行作家

杉田 房子

##### 第6章 アジアへの道

ハワイで客死したとはいえ、遺命でオホーツク海までも乗艦を北上させたクック艦長は、1776年8月の航海日誌にこう記している。

「きわめて上質のじゃがいも、玉ねぎ、カボチャなどを生きた牛と一緒に購入した」

イギリスのプリマス港を出発してから十日後、アフリカ沖のカナリア諸島に立寄った時のことである。

南はニュージーランドから北はベーリング海峡まで、太平洋をくまなく探検航海したクックの死は、それから三年後のことになるが、その死後も航海をつづけた乗艦が補給に寄ったカムチャッカ半島はもちろんサハリン島にもじゃがいもが根づいていたということは、アフリカとシベリアという大陸のへだたりも、大西洋と北太平洋という大海原のひろがりも、じゃがいもは超えていたことになる。

もちろん、この間にはアジアの広大な陸と海がある。中近東の果てしない砂漠がある。それどころか、じゃがいもがクックの船に積み込まれたカナリア諸島と目と鼻の先のアフリカが、当時は針の先で突ついたほどのことしかわかっていない。じゃがいもも、人間も。自然も、おたがいにまるで知らない世界が、当時はまだまだ途方もないまでにひろがっていたのだった。

なにしろ、カナリア諸島の南で、アフリカ北西の砂漠が大西洋に落ち込むナン岬から先は、いけば二度と帰れない否定(ナン)の世界、とヨーロッパ人は長いこと信じていた。

海は暑熱でわきかえり  
地は灼熱  
船は黒こげに焼け  
人は黒い肌に変じ  
想像外の怪物だけが  
ぎらつく太陽の下で  
わがもの顔にうごめく

船乗りが歌にまでしたこの迷信は、スペイン人のジル・エアンネスが1432年カナリア諸島南のボハドール岬を越え、1445年にディエス・ディアスがアフリカ最西端のヴェルデ岬に着いても、なかなか破られない。

ポルトガル人のディエゴ・カムが、1471年に赤道を越え、さらに1488年、ついにアフリカ最南端に達したバルトロミュ・ディアスは、まさに地の果てとなって終わる岬を「嵐の岬」と名付けた。船が難破しなかったのが奇蹟というしかない猛烈な暴風雨が吹き荒れていたからだった。

1498年、ヴァスコ・ダ・ガマがこの岬をまわってインドに達し、東方航路が拓かれた時に、ポルトガル国王ジョアン二世が、「喜望峰」と命名し直したのは、それまでの迷信の時代は終わり、喜望に満ちた未来への期待に因んでいる。

カナリア諸島で船に積み込まれたジャガイモが南下していったのは、そういう「嵐」と「希望」がない混ぜになった海と陸のひろがりだったのである。

カナリア諸島は、コロンブスが新世界に移植したクリオーリョ種の砂糖キビを積み込んだところである。

カリブ海の島々にあった野生の砂糖キビとは段違いに太く、豊かに育つクリオーリョ種は、金銀をさらいつくした後の島々で、スペイン人に精糖産業という新しい富をもたらしたが、キビを栽培し、刈り取り、糖蜜を絞り、砂糖を精製したのは、

アフリカから連れていかれた黒人だった。

砂糖キビを送り出したカナリア諸島は、そうした黒人を運ぶ船の足溜まりともなり、補給基地ともなる巡り合わせを持った。アンデスからパナマへ、そしてカリブ海から大西洋へ、インカ男女とともに地球を西から東へ向かったジャガイモは、コロンブスが切開いた新世界の島と海と船とで働く肌が真っ黒な人間に仰天したが、それはジャガイモが越えていく海を、逆に東から西へ揺られていく船に乗せられ、運ばれていった人々だったのである。

1659年 オランダ船シンド・ヤン号 219人中  
の110人死亡

1678年 イギリス船アーサー号 417人中  
88人死亡

1694年 イギリス船ハンニバル号 700人中  
320人死亡

すらりと並ぶこうした航海記録は、アフリカから奴隷として運ばれた黒人と、死者を示している。ざっと数えて3分の1が死ぬ悲惨は、船倉にぎゅう詰めの不健康と、ろくに食べ物を与えられない飢えが主な原因だった。

スペインとポルトガルが1676年に結んだ協定には、年間少なくとも「奴隷1万トンを供給する」と書かれている。人間ではなくトンという数量でしか見られていなかったわけだが、協定には1トンは奴隷3人と記されているから黒人3万人、死者の予想を入れれば5万人「供給」することを意味する。

ヨーロッパ本土ですら凶作や戦乱で飢饉がたび重なっていた時に、人間とは思われていないこうした黒人が、運ばれる船で食べ物らしいものを与えられなかったのも不思議ではない。アフリカ西海岸で黒人輸送にあたったイギリスのギニア会社が、1651年にやとった船に対して、こういう指示を与えた記録が残されている。

「可能な限りの黒人奴隷を積み込むこと。充たさ

れない場合は牛を、さらに空間があれば豚を積み込むこと、飼料用のポテト等は、その頭数によってきめる」

豚、牛と並んで船倉に積み込まれた黒人。家畜並みの頭数で勘定された黒人。家畜用の飼料という文字はあっても、人間の食料という字ひとつないこの指示書は、黒人3人のうち1人は死んでも構わないという指示書でもあったことになる。

ヨーロッパ本土で、最初、じゃがいもは豚の飼料にされたものだが、アフリカと大西洋と新世界では、じゃがいものポテトは豚と黒人の共通の食べ物とされたということである。

それは、悲惨な運命が待つ新世界に向かう黒人に対して、新世界に生まれたじゃがいもの、無言の励ましであり、体を投げだしてのはなむけのようにさえ思える。

しかし、飢えと渇きがいつもか紙一重で隣りある航海のつらさでは、アジアをめざして東方航路をいく船乗りも、実は奴隷船とたいして変わりはなかった。

カナリア諸島でじゃがいもを積んだクック艦長は、アフリカ南端のケープタウン港に着くまで、2か月近くかかっている。それが1776年のことだから、ヴァスコ・ダ・ガマが1498年に開いた東方航路を手さぐりでいくのに等しい帆船は、大西洋からインド洋に出るまでが運試しさながらの航海だった。

なにしろ、このあたりの空は、夏冬を通して南から北へ貿易風が吹いている。海も、波調をあわせて、ベンゲラ海流が南から北へ流れている。南下する帆船は、その風と潮に真正面からぶつかった。

「セントヘレナ湾に錨を入れる。セントマルタン岬が風波をさえぎってくれる上に、緑深い陸地から川が注ぎ込んでいる。休養と給水ができるのは間違いないし、たぶん、新鮮な果物なども得られるだろう。神に感謝」

喜望峰をまわってインド洋にでる前、ヴァスコ・ダ・ガマはこのように記している。やたらに聖人の名に因んだ地名は、そこに着くまでのつらい航海と、不自由な食物や飲料と、したがってそこからの救いの願いを物語っていた。

ヴァスコ・ダ・ガマが給水したところは、それから長いことサルダーニヤの給水地と呼ばれて、帆船の足溜まりになった。いまではグロオテ・ベルグリオ河と呼ばれる川の両側に広がる平野は、たしかに「新鮮な果物なども得られる」ところだったし、1867年にキンバリー付近でダイヤモンドが、1886年にヨハネスブルグ付近で金が、それぞれ発見されるまでは、南アフリカで唯一の産業だった農業の中心地の一つにさえ数えられた。

「サルダーニヤの給水地までくれば、もうこっちのものさ」

東方航路をいくにせよ帰るにせよ、ポルトガルの船乗りがこういいあったのは、ヨーロッパからインドの南岸まで早くて四か月。時としては半年掛かりだった航海からすれば無理もない。

新鮮な水、トウモロコシのパン。甘いオレンジにバナナ。羊か牛の焼き肉。その脂で揚げたじゃがいも。食卓には煙草――――。

十七世紀に、ここに寄った船が補給し、船乗りが食べた物の記録は、貿易風とベンゲラ海流の風波に荒れる大西洋をへだてた新大陸から、じゃがいもはもちろん、トウモロコシから煙草までが、もうアフリカ大陸の最先端にまで渡ってきていたことを示している。

サルダーニヤの給水地で息を吹き返し、運は「こっちのものさ」と勇気づいた船乗りは、そこで喜望峰をまわり、アフリカ東岸を北上していった。マダガスカル島を沖に見るモザンビクへ、キリマンジャロ河口のザンジバルやモンバサへ。インドにじりじりと近づく船乗りたちと一緒に、じゃがいもやトウモロコシや煙草も、インド洋の風波を浴びて進んでいったのだった。

アフリカのザンジバル島に着いたじゃがいもが、

太陽の動きを一年中見守ったとしたならば、遠のくのも近づくのも、生まれ故郷の南米のアンデス山地とそっくりなのに気がついただろう。

この島からどこまでも真つすぐ東へ、インド洋を越え、南アジアと大洋州の島々との間を抜け、太平洋を渡った果てに、南米のアンデスは横たわっている。はるか遠く隔たるこの二つの土地も、地球の緯度で言えば、南半球の同じ線の上にあった。

しかし、アンデスではすべてがからりとしているのに、ザンジバルでは万事がべとりとしていて、大気さえねっとりとなまつわりつく。

「黒褐色の裸体にヤシの葉を腰にまとっただけの男が乗った小舟に、なんと丁香、ショウガという貴重なものが積まれていた」

東方航路をポルトガルからアジアに向かったジョアン・デ・バロスは、こういう見聞を1506年に記している。

丁香は乾燥させた花芯が丁字形になるので、丁字とも書かれる。辛い味が調味料に、刺激的な香りが香料に使われた。その丁香の実が樹には育ち、土にはショウガの鼻につんとくる根茎がはびこるのでは、大気がねっとりとするのも不思議ではない。

丁香やショウガは、ヨーロッパにはもともとまらぬものなので、絹がシルク・ロード（絹の道）でやってきたように、スパイ・スロード（香料の道）で東方からもたらされた。

香辛料のほかに、胃腸薬から媚薬までの薬剤としても、古くから珍重されている。はっきりしている史実だけでも、フランク王国の国王ヒルベリック二世が「丁香課税勅令」を発布したのは、まだ、西暦716年のことなのである。

ところが、砂漠から北進したアラブ・イスラム教徒と、これに対抗した十字軍の遠征に加え、オスマン・トルコの台頭という戦乱と荒廃で、絹の道も香料の道も閉ざされてしまう。船による東方航路は、その陸の道に代わる海の道で、こうした

貴重な品々を得ようという欲望からもきていた。

それが、小舟に無造作に積んであったのでは、「なんと」と目を疑うのも無理はない。なにしろ、喜望峰を回ってからも、航海の困難はつづく。バロスによれば、「とにかく、どこでもむっと暑い」毎日、おまけに「食べ物はもちろん飲み水を得るのも容易ではない」。丁香とショウガと並んで、小舟に「イニヤーモと鶏があった」というバロスの記述は、貴重な品を目の前にして、しかも飢えを満たせる二つの欲望に、目を輝かせるポルトガル人の姿をありありとさせる。

イニヤーモとは、ヤムイモのポルトガル語読みだが、イモと鶏で飢えを満たした船乗りは、丁香探しに目の色を変えた。

それは、地球の東と西のへだたりと気候に風土の違いはあっても、じゃがいもを食べていたアンデスの人々を襲ったスペイン人が、情け容赦なく金銀を奪ったのとまったく同じことだった。

丁香は、赤い花を咲かせる。ぼつてりと厚い緑の葉の間に、太陽を仰ぐように開くこの花は、彩りといい香りといい目につきやすい。この丁香を事もなげにとって歩くポルトガル人と「黒褐色の裸体」の住民とは、やがてあちこちで衝突した。欲望に目のくらんだポルトガル人は、怒り狂って住民の家々を焼き払う。

「ひゃあ、丁香の花そっくりじゃないか」

燃える家を眺めて、船乗りは奇声を上げた。緑濃い密林の中で、焼ける家からばあっと上がる炎は、ぼつてりとした緑の葉の間で赤く咲く丁香に、確かに似通っていた。

ポルトガル人が、住民の家を焼き払うほど欲望に駆られたのは、丁香を探しているうちに、金銀から象牙までであるのに気がついたことにもよる。ザンジバル島対岸のモンバサでは女が銀の腕輪をしていたし、クリマンジャ河沿いの家には象牙が飾られていた。

実際、ザンベジ河上流のモノモターバには豊か

な金鉱が在ったが、ポルトガル人の余りの強欲に恐れをなした住民は、金鉱の在り場所をひた隠しにした。やがて、ポルトガル人はモノモターバに近いソフアラ港に砦を築くが、近くに金鉱が在ったことに長いこと気がついていない。

それでも、ポルトガル人の得たものは大きかった。ヴァスコ・ダ・ガマが1497年に東方航路を開いた後の1500年から22年まで、バロスの記録では少なくとも250隻がインド洋に現れている。一隻に百人相当が乗り組んでいた当時、これは25,000人以上のポルトガル人がいたことを指すが、ソフアラに続いて、モザンビク、キロアといった港に砦が築かれたのは、こうした船と人との足溜まりが必要になったからだし、集めたものが中継ぎして運ばなければならなかったほど多くなかったからである。

しかし、ザンジバルからさらに北上すると。砦を築くのはもちろん、陸に船を寄せるのも難しくなる。ヨーロッパから陸伝いに東西を結んでいた絹の道や香料の道をさえぎったアラブ人をはじめとするイスラム教徒が。海の道にも立ちはだかっていたのだ。

「ザンジバルという島名は、アラビア人が黒人の奴隷をザンギと呼ぶのに由来する。ザンジバルは、ザンギのいるところを意味した」

バロスよりも半世紀ものちの1583年にリスボンを発ったリンスホーテンは『東方案内記』にこう書いている。ヨーロッパ人が黒人を奴隷とするはるか以前から、アラブ人はアフリカの住民を奴隷として島ぐるみ支配していたのだった。ポルトガル人の進出を、黙って許すはずがない。

アフリカ東岸がアラビア海で尽き、紅海に入るところに浮かぶソコトラ島では、「革の着物を身に着け、生皮で作った盾を持った女まで戦う」のにバロスは驚いている。当然。食料も手に入らない。1513年、アルブケルテ指揮下のポルトガル船隊は、アラビア半島南端のアデンの攻略に失敗した上に飢えに苦しみ、漁ったカニでほとんど全員

が中毒にかかったりした。

「小麦のパンがある。米という穀物があり、肉がある、果物はないものがない。ナツメ、ブドウ、メロン、オレンジ、バナナ、水々しいリンゴやザクロという珍しい果物もある。こういう果物の砂糖漬は珍味そのものだ」

1512年。ホルムズ島に着いたポルトガル人トメ・ピレスは、食物の豊かさに目を見張っている。ホルムズ島は、アラビア海がペルシャ湾に接する喉首にある。アフリカ東岸からアラビア半島にかけて、食べ物にも飲み水にも不自由した航海のあとでは、それはまさしく別の世界を見るようだった。

なにしろ、ここにはポルトガル人にはなじみ深いイタリアのヴェネチア製の毛織物や、エジプトのカイロ製のモスリン織がある。かと思えば、ヨーロッパ人にとっては夢そのもののインディエ（インド）の胡椒や肉桂があり、キタイ（中国）の絹や香木がある。栗毛色も艶やかなアラビア馬に、丸く眩しいバーレン真珠に――。

「このあたりの人々は、世界は四大港の取引で成り立っていると思っているようだ。南のアデン、このホルムズ、東のゴア、さらにその東のマラッカ。それ以外は、要するにどこにでもある町や港にしかすぎないらしい」

という印象をピレスは記している。それほど、この東方の世界は昔から生き生きと活動していた。ヨーロッパがあることは品物の取引で知っていても、それがあろうがなかろうが、この世界はびくともしなかったのである。

なにしろ、地球を縦に切る経度線が見れば、ポルトガルからこのホルムズまでよりも、ここから東のアジアのほうが大きくひろがる。東方航路をいままできたのと経度を同じだけ進んでも、中国の絹が運ばれてくるキンサイ（杭州）にもいき着けないし、黄金の国ジパング（日本）はそのはるか東にある。

(つづく)

### ボリビア関係刊行物の頒布斡旋

①『Los japoneses en Bolivia』2013-9 100años de historia de la inmigración japonesa en Bolivia を原典として2012年までを追補 在庫多数

②『大地に生きる沖縄移民』2005-12 コロニア・オキナワ入植50周年記念誌、在庫1冊

③『ラパス日本人会 90年の記録 1922-2012』2012-10 在庫2冊

④『ボリビアを知るための73章』(第2版) 2013・2 明石書店刊行

①-③とも統一価格 2500円

④は2000円 (いずれも税・送料込)

ご注文は下記当協会までメール又は電話でお名前、ご住所、電話番号、書籍名、冊数をご連絡ください。 [admin@nipponbolivia.org](mailto:admin@nipponbolivia.org)

042-673-3133 (杉浦)

お支払は銀行振込でお願い致します。

(口座番号、名義人は発送時ご連絡します)

### 協会活動の近況

10月13日：川崎国際フィエスタ2018 (川崎市主催)  
(幸市民館) 杉浦専務理事参加

10月14日：Bolivia Festival 2018 (港区芝公園広場) (実行委員会主催)  
在日ボリビア人・ボリビア日系人・当協会会員・椿会長ほか執行グループ参加  
参加総数約3000名

10月22日：ラテンアメリカ婦人協会バザール (港区東京プリンスホテル) 杉浦専務理事参加

12月6日：ボリビア協会主催X' Maaイベント (東銀座・サロンド・ジュリエ)

在日ボリビア大使館、外務省、協会会員椿会長ほか役員、一般参加者を含めて総数50名ほど。

### 編集後記

カントウータ34号をお届けいたします。この号では、ボリビアの政治・経済に詳しい遅野井茂雄氏に、エボ・モラレス大統領をとりまく最近のボリビアの情勢について、また、ボリビアのスクレに定住しておられる梶川嗟慧子氏にこの学園都市の近況を、さらにオキナワ県民ボリビア移住110周年記念式典に参加された渡邊英樹氏からはボリビア訪問記を、夫々寄稿していただきました。

お三方には厚く御礼申し上げます。

2018年の年の瀬も近づいてきました。皆様お元気で越年されますようお祈り致します。

### 編集委員

椿 秀洋、杉浦 篤、細萱 恵子

Copyright© 2002-2018

一般社団法人日本ボリビア協会 ASOCIACIÓN NIPPON-BOLIVIA

All rights Reserved

(本誌の全ての掲載記事、写真、図表などの複製、転載、改変は禁止されています)